
変装の果てに

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変装の果てに

【Nコード】
N6003Q

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
川西竜蔵は変装を得意とする奇術師である。彼は変装をしているうちにやがて自分の顔がわからなくなり。顔と変装をテーマにした作品です。

第一章

変装の果てに

川西竜蔵の職業は奇術師である。様々なマジックを見せてそれで生きていく。

そしてその他にはだ。変装も趣味にしている。

そちらは只の趣味だがそれでもだ。かなり有名になっていた。

「へえ、誰にも？」

「誰にも化けられるって？」

「そりゃ凄いな」

ネットでも巷でもそのことが話題になっていた。

「顔をそっくりにか」

「しかも姿形も」

「そっくりそのまま化けられるって？」

「二十面相みたいだな」

伝説の怪盗の名前も出て来た。

「それかアルセーヌルパンだな」

「その孫かもな」

これまた怪盗であった。

「そんな凄い人なのか」

「変装が得意だっていうのか」

「一度見てみたいな」

「そうだよな」

こうした流れになるのも当然だった。

「じゃあ俺にも変装できるかな」

「私にも」

「若しできるんなら」

「見てみたいわね」

こうしてだった。多くの人が彼がいる街に向かった。彼は九州の

博多にいる。大道芸の盛んなこの街でだ。奇術を見せていたのだ。

その奇術を見て誰もが驚く。見事なマジックだった。

しかしだ。今はであった。

その彼のもう一つの才能を見る為にだ。誰もが集まっていた。

一見すると平凡な顔立ちである。銀縁眼鏡に扁平な顔、髪は黒く七三分けにしている。本当に何処にもいそうな顔をしている。

背は一七三程度でひよろりとした感じだ。とてもそんな物凄いことをしそうには見えない。

だが今は違っていた。誰もが期待に目を輝かせてだ。彼に言うのだった。

「それでなんですが」

「あの、変装」

「できますか？」

「よかったです」

「ああ、いいですよ」

気さくな態度で言葉を返す彼だった。

「変装ですね」

「はい、そうです」

「できますか？」

「すぐに」

できるといふのであった。

「何でしたら今ここで」

「うわ、もうなんですか」

「そんなに楽に」

「これがありますから」

言いながらバイオリンケースを出してきた。黒い只のケースである。皆そのケースを見ておおよそのことに察しをつけたのであった。

「ああ、その中にですか」

「メイクの道具が入ってるんですね」

「はい、そうです」

まさにその通りだった。本人も答える。

「これを使いますから」

「それで変装を」

「今から」

「ではいいですね」

「ええ、それでは」

そしてだった。バイオリンケースを開いてだ。前にいた一人の若者に尋ねた。

「貴方でいいでしょうか」

「あつ、俺ですね」

「はい、貴方です」

まさに彼だというのだ。

「貴方に変装させてもらいますね」

「じゃあ御願ひします」

若者も笑顔で応えた。

「そっくりに」

「鏡みたいでいいですよね」

竜蔵からの言葉である。

「そんな感じで」

「できます？そこまで」

「できなければです」

その場合のことをだ。自分から話すのだった。

第二章

「その時は私からお金を払いますよ」

「えっ、いいんですかそんなこと」

「これが私の芸ですから」

にこりと笑って話す竜蔵だった。

「そうさせてもらいます」

「そうですか、そこまで仰るのなら」

「はい」

「そっくりにですよ」

若者からの言葉だ。

「本当にそっくりに」

「わかっていきます。では」

「よし、それじゃあ」

「見せてもらおうかな」

「そうよね、一体何処までそっくりになれるのか」

「是非ね」

周りもその言葉に乗る。こうしてだった。

竜蔵はすぐにメイクをはじめた。それは瞬く間であり気付けばだ。

鏡がそこにあった。

「うわ……」

「これはまた」

「本当だったなんて」

「いや、全く」

まず周りが唖然となった。

「そっくり」

「鏡があるみたいよ」

「嘘じゃなかったんだ」

「如何でしょうか」

髪型までそのままにしてだ。竜蔵は周りに尋ねた。

「鏡になっっているでしょうか」

「うん、確かに」

若者からの言葉である。

「なってますよ。ほら」

彼が鏡を出すとだった。鏡に彼が二人いた。それを見ればそれだけで明らかであった。

言葉通りだ。まさにであった。竜蔵の言ったことは嘘ではなかったのだ。

若者はそのことに満足してだ。それで言うのであった。

「若し失敗した時はお金を払うって言いましたよね」

「はい、確かに」

「凄いですよ、本当に俺そっくりです」

「有り難うございます」

「失敗した時は貴方が払うってことですから」

またこう言っただであった。

「鏡になったんですから。それじゃあ」

「そうだよな、ここはな」

「いいもの見させてもらったし」

「それじゃあ」

周りもこう言っただであった。そして。

若者だけでなく周囲もお金を出してきた。千円や二千円ずつだったがそれなりに数があるので。かなりの額になったのだった。

その全てが竜蔵の手に入った。彼は笑顔で周りに言う。

「有り難うございます」

「いや、ここまで凄い変装ができるなんて」

「これは才能だよな」

「全くだよな」

そのうえでこう話されるのだった。彼のその変装のテクニクは完璧と言っただであった。

それはだ。噂通り性別が違つてもできた。

ある日老婆に変装を頼まれるとだった。これまた。

「あねれまあ、こんなごつなつたとよ」

九州の言葉がそのまま出ていた。何と自分自身がそこにいたのだ。銀色の髪に眼鏡で痩せた顔、まさに彼女自身だった。

その顔を見てだ。九州弁そのまま彼に言う。

「いやお兄さんあんたすごかとよ」

「そうですね、そんなに」

「これは才能ばい」

そして笑顔でこう告げたのだった。

「あんた天才ばいよ。ここまで出来る人おらんとよ」

「有り難うございます」

「うん、はいこれ」

そしてだ。お金を出したのだった。竜蔵が足元に立てている変装代の二千円をだ。彼に出したのである。他にも見たいマジックもあった。こっちはかなり格安であり五百円だった。

「受け取りんしゃい」

「はい、それでは」

「いやあ、こんな人がおるとよ」

老婆は九州弁で喜んでいた。とにかく誰にでも変装できる彼だった。

第三章

それで彼のところには毎日ひっきりなしに変装を御願ひする人が来た。それこそ一日に何度も何度も変装する。その都度違う顔にだ。それで収入はかなりのものになり地元テレビ局からも仕事の依頼が来たりした。そんなことが続いていた。

しかしであった。ここぞだ。

彼はふと気付いたのだった。それを行きつけの屋台のラーメン屋でこぼした。

「そういえば」

「どうしたんだい？急に」

「いえ、あのですね」

親父の言葉に応える。話をしながらラーメンを食べる。九州のそれらしく白い豚骨スープである。その中に細い麺が豪快なまでに多量に入れられている。

ゴマや紅生姜も入っているそのラーメンを食べながらだ。彼は言うのだった。

「最近変装関係の仕事が多くて」

「そうだね、確かにね」

「それでなんですけれど」

「随分稼いでるじゃないか」

親父は笑顔でこう言ってきた。

「働いてね。いいことじゃないか」

「いや、それはいいんですよ」

そのことは問題ではないというのだった。

「ただ」

「ただ。何だい？」

「どうもね。最近色々な人に変装していて」

「それがどうかしたのかい？」

「顔がわからなくなってきたんですよ」
「そうやってきたというのだった。」
「どうもね」
「わからなくなってきたって?」
「自分の顔がね」
「おいおい、自分の顔がわからなくなってきたっていつのかい」
「そうなんですよ」
「首を傾げながら話した。」
「他の顔になり過ぎて」
「おかしなことを言うな、あんたも」
「親父はその彼にこう言うのだった。」
「どうもね」
「おかしいですか」
「うん、あんた今はメイクをしていないだろ」
「はい」
「その通りだと返す。」
「仕事はしていませんから、今は」
「じゃあ今の顔があんたの顔だよ」
「今の顔ですか」
「そうだよ、あんたの顔なんだよ」
「そうなんですかね」
「それ以外の何だっただよ」
「親父は竜蔵にこうも話した。」
「違うかい?」
「それはそうですけれどね」
「ちょっと考え過ぎじゃないかい?」
「親父はまた彼に話した。」
「それはちよつと」
「はあ、そうなんでしょうか」
「そうだよ。そこまで考えるんだったらな」

「そこまで？」

「いつちよ顔を消してしまっただらどうだい？」

「こつ竜蔵に言った。」

「顔をね」

「顔をですか」

「そうだよ。消してみたらどうだい？」

「顔を消すんですか」

「そう、消してみたらどうだい？」

「そしてだ。ある妖怪の名前を出すのだった。」

「のつぺらぼうみたいにな」

「のつぺらぼうですか」

「ほら、怪談の」

「あのあまりにも有名な小泉八雲の作品の話も出て来た。」

「こんな顔かい？っていうあれみたいに」

「ああいう感じで、ですか」

「一回リセットするのも悪くないだろ」

「言われてみれば」

「話を聞いてだ。竜蔵も考えるものになった。」

「そしてだ。そのうえで話すのだった。」

「やってみますか」

「試しにしてみればどうだい？」

「そうですね、それじゃあ」

「とりあえず頷くものにした。そうしてだった。」

第四章

次の日だ。またマジックや変装を客達に見せていた。この日も色々な顔になってみせていた。人は多く今日も実に多忙な彼だった。

その中でだ。彼は言うのだった。

「あのですね」

「うん」

「何ですか？ 一体」

「ちよつと自分で自分のしたい変装をしてみたいのですか？」

こつ周りに話すのだった。

「それをして」

「んっ、何をするのかな」

「そつよね、一体」

「何を？」

「はい、これです」

言いながらメイクの道具を出してだ。そしてだった。

いつも通り瞬く間に変装してだ。なったのは。

「えっ!？」

「それつて」

「まさか」

驚く周りにだ。この言葉を言ってみせたのだった。自分でも。

「こんな顔かい？」

「あはは、のつぺらぼうか」

「顔がなくなつた？」

「そつだよな、これつて」

「変装し過ぎて顔がなくなつたの」

「いやいや、参りました」

驚き笑つ彼等に自分から話した。

「何か顔が消えてしまいましたね」

「けれどそれじゃあ困るだろ」

「そうよね。見えて食べられるはするみたいだけれど」

「それでも」

「そうですね。これではどうしようもありません」

その目も鼻も口もない顔でも言う。彼は腹話術も仕えるのでここではそれを使ってだ。そのうえで周りに対して話をするのだった。

「どうしましょうか」

「ううん、そうだな」

「ここは元に戻ったら？」

「そうだよな、のつぺらぼうから」

「奇術師さんの顔にね」

「そうですね、それがいいですね」

彼は周りのその言葉を受けて頷いた。

そしてだ。またメイク道具を出してだった。

これまた瞬く間にだ。変装を解いた。そのうえでまた言うのであった。

「これでどうですか？」

「うん、戻ったよ」

「奇術師さんの少しの顔にね」

「戻ったよ」

「ちゃんと」

「それは何よりです」

彼は周りのその言葉ににこりと笑って述べた。

「私の顔にですな」

「戻ったよ」

「ちゃんとね」

「それは何よりです」

わざと鏡を出してそのうえで見る。そうしてだった。

鏡の中を見ていると当然そこに彼の顔がある。その顔を見てだ。しみじみと思うのだった。

「そうか、これが僕の顔なんだ。ちゃんとここにあるんだな」

「あれっ、奇術師さん」

「一体どうしたのよ」

「急にしんみりとして」

「何かあったの？」

「あっ、いえ」

周りの言葉に我に返ってだ。慌ててそちらに戻った。

そしてだ。いつもの明るい調子で言うのだった。

「何でもありません。しかしです」

「しかし？」

「それで？」

「顔が戻って何よりです」

奇術師に戻っての言葉だった。

「いやいや、本当に」

「そうだよな。それじゃあ」

「今度は私の顔になってくれるかな」

「次は俺な」

「それでその次はうちの顔に」

「はい、待つて下さいね」

自分の顔を確かめられてそれで喜んでいるのは隠して彼等に応じる。そしてだった。

「じゃあどんどんならせてもらいますよ」

「御願いますわね」

「それじゃあな」

「はい」

こうしてだった。彼はまた他の人の顔になるのだった。だが彼の本来の顔がちゃんとあることがわかってだ。確かな気持ちでそれになれるようになっていたのだった。それが今の彼だった。

変装の果てに

完

2
0
1
0
・
9
・
9
・
2
9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6003q/>

変装の果てに

2011年2月2日21時40分発行